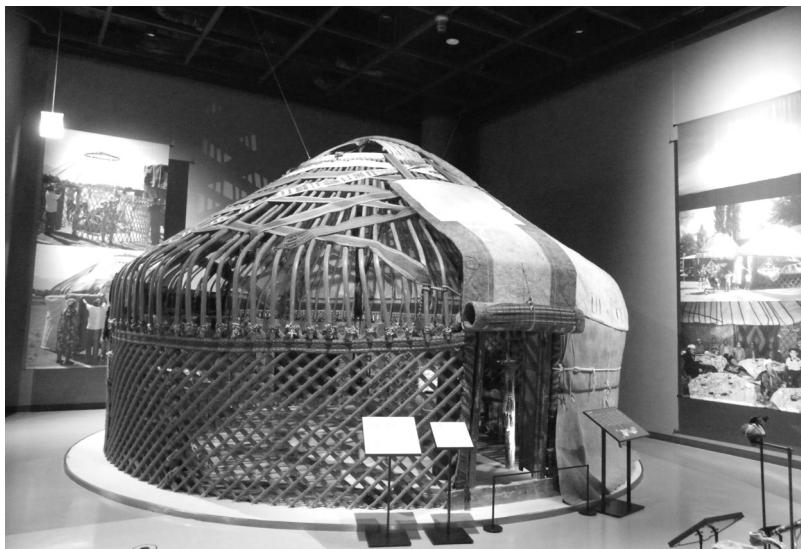


国立民族学博物館の収蔵品③

カザフスタンの天幕



国立民族学博物館で展示しているカザフスタンの天幕。木の枠組みが見えやすいよう、フェルトは半分取り外している。



天幕の内部。中央に炉がある。正面はトルと呼ばれる上座。

遊牧民の天幕といえば、モンゴルのゲルがよく知られているが、写真は中央アジアのカザフスタンの天幕である。天幕を、カザフ語では「キイズ・ウイ、すなわち「フェルトの家」と呼ぶ。木の枠組みを、フェルトですっぽりと覆うことからこの名がついた。

カザフスタンは日本の約七倍という広大な国土を有しており、その国土の西南部、カスピ海に突き出たマングシュラク半島で、あるカザフ人一家が二十世紀半ばまでこの天幕に住んでいた。遊牧民として、家畜を放牧しながら季節移動して暮らしていたのである。

この天幕を支える木の枠組みはすべて赤く塗られており、この家の女性が羊毛を紡いで織った美しい飾り帯が、天井の内部に張りめぐらされている。床にも手製のフェルトが敷かれ、衣装箱が部屋の隅に並ぶ。入り口から正面がトルと呼ばれる上座で、家の主人や尊敬すべき

客人が座る。天幕の中央には炉がもうけられ、肉などを煮炊きする大きな鉄鍋が置かれている。燃料は、薪と乾かした牛糞・羊糞である。炉の真上、ちょうど天井の中央には天窓（円形の木枠）があり、煙を外に出し日の光を外から取り込む役目を果たす。この天窓はシャヌラクと呼ばれ、家族の象徴である。炉を囲み天窓のもとに家族が集つたことを、よく表しているといえよう。

ソ連時代の定住化政策によって、カザフ人の大部分は定住家屋に住むようになり、日本とあまり変わらない都市部のマンションに暮らす場合も多い。こうしたなかで、実際に住居として使われ、来歴が比較的はつきりしている天幕はカザフスタンでも数少なくなった。この天幕は、国立民族学博物館の教授であった故・加藤九祚がロシアの研究者をとおして収集し、一九七九年に中央・北アジア展示が開設された

当初から貴重な資料として展示されてきた。現地の博物館でも、炉のしつらえまで再現している展示はめずらしい。

現在では、日常的な住居としてはあまり使われなくなつた天幕であるが、カザフスタンがソ連から独立して以降、カザフ文化の象徴としてしばしば注目されるようになった。祝祭などの際には、草原の村のみならず、現代的な都市の人々が集つて共に食事し語らう場所にも天幕が建てられ、多くの人々が天幕を分解してしまっておくことができる天幕は、多くの人々が集う現代のカザフの祝祭に欠かせないものとなっている。